

武蔵野 ヒストリー

武蔵野にまつわる歴史を
楽しみながら学ぶ



武蔵野市の不発弾処理

今もなお「戦争の爪痕」として各地に残る不発弾。戦時中、たび重なる空襲の被害に遭った武蔵野市でも、戦後になって市内から何度か不発弾が発見され、処理されています。今年で戦後75年。地中深くに眠る不発弾は、いまを生きる私たちに何を問いかけているのでしょうか。

戦時中、爆撃機や戦闘機によって地上に投下された爆弾のうち、爆弾を作動させる「信管」の不良など、何らかの原因で爆発することなく地中や海底に残されているものを「不発弾」と呼びます。日常生活の中で目に触れることがないため、私たちは不発弾の存在を意識することはほとんどありません。

しかし、今も各地に不発弾が残されている可能性があることも事実です。それは武蔵野市においても例外ではありません。戦時中、航空機のエンジンを製造していた中島飛行機武蔵製作所があったことから、爆撃の標的となった武蔵野市には、9回にわたる爆撃で大量の爆弾が投下されました。

このうち、どれだけが不発弾となったのか、詳細は定かではありませんが、戦後になって武蔵野市内では工事現場などから不発弾が見つかり、そのたび

に安全性に最大限配慮しながら適切に処理を実施してきた歴史があります。今回はその主な経過を振り返ってみました。

住宅やマンションが建ち並ぶ 人口密集地で行われた 緊迫の不発弾処理

市の記録を見ると、昭和40（1965）年12月、八幡町1丁目の下水道工事現場で1トン爆弾の不発弾処理が行われて以降、昭和44（1969）年2月の井の頭恩賜公園内、昭和63（1988）年6月の関前2丁目マンション建設現場など、武蔵野市では二十数年間で複数回にわたり不発弾処理が実施されていることが分かります。戦後の復興期が終わり、日本全体が高度経済成長に向かうなか、さまざまな場所で

建設工事が行われたことによって、一方で不発弾という「戦争の爪痕」の存在が浮かび上がったのです。

バブル景気に沸く昭和63年に関前2丁目のマンション建設現場で発見された不発弾の処理の様子は、「ドキュメント不発弾処理」（武蔵野市不発弾処理対策本部制作）と題された映像に克明に記録されています。



1988年現地対策本部の様子

6月13日、マンションの建設現場から1トン爆弾の不発弾が見つかったとの報告を受け、当時の土屋正忠市長を本部長として、市と陸上自衛隊、警察、消防などからなる対策本部を設置して対策についての協議を開始しました。

1トン爆弾は米軍が投下した爆弾の中でも最大級の2000LB爆弾で、全長約2メートル36センチ、直径60センチメートル、火薬の量は約500キログラム。万が一、この爆弾が爆発したら、地上で破片が飛び散る範囲は半径約2キロメートル、爆風は半径約500メートルに及ぶとされ、甚大な被害が発生することが想定されました。住宅やマンションが建ち並ぶ人口密集地で不発弾が発見されたことを受け、半径500メートルを危険区域に設定し、4971世帯・1万848人に避難勧告が出される事態となりました。

市は地域住民への広報や告知を徹底し、一人暮らしのお年寄りや介護施設の入居者の避難をサポートするなど、事前準備を整えたのち、発見から2週間後の6月26日に不発弾処理を実施。陸上自衛隊の不発弾処理隊が手作業で爆弾の信管を慎重に抜き取り、爆発の恐れがなくなった本体をクレーンで吊り上げてトラックへと積み、自衛隊駐屯地へと運び出して、緊迫の不発弾処理は終了しました。

平成の世に入り 戦争が遠くなっても 不発弾の発見と処理は 終わらない

その9年後の平成9（1997）年には、緑町3丁目のNIT武蔵野研究開発センタ研究棟新築工事現場から、6月と7月の2回、立て続けに不発弾が発見・処理されています。いずれも9年前と同じ1トン爆弾でした。1回目の不発弾は地下5メートルの深さにあり、2回目は地下11メートルの位置から発見されていますが、当時の探査技術では、この程度の深度差がある場合、一度に発見するのは困難だったと記録にあります。

1回目は3864世帯・8487人が、2回目は2672世帯・6347人が避難を余儀なくされ、いずれも武蔵野市だけでなく半径500メートル圏内にある保谷市（現・西東京市）と練馬区の一部も避難区域に指定される一大事となりましたが、無事に処理は完了しました。

さらに、こんなこともありました。2階建てだった武蔵野市役所西棟の増築工事が計画されていた平成18（2006）年、地下から金属反応が出たため、不発弾が埋まっているのではないかとこの疑惑が浮上したのです。そこで同年2月、市役所を一時閉庁し、陸上自衛隊も出動して地下の調査を実施。その結果、鉄分を含んだ地層が検査機器に反応していただけで、不発弾は埋



信管が抜かれ運び出される不発弾

まっていなかったことが判明し、事なきを得ました。

時を超えて現れる戦争の爪痕 不発弾が私たちに 問いかけるもの

例えば、沖縄県では昭和47（1972）年の本土復帰以降にも工事現場などで不発弾による爆発事故が発生し、死傷者が出たこともあります。今も沖縄では不発弾処理に年間約30億円もの予算を費やしていると言います（2017年度）。

防衛省によれば、平成30（2018）年度に日本国内で処理された不発弾は1480件、合計約53トン。東京都でも、令和元（2019）年に江東区のタワーマンション建設現場から3発の不発弾が発見されたニュースが記憶に新しいですが、今もなお、「戦争の爪痕」である不発弾が地中に眠っていることを考えると、戦争ははるか遠い過去の出来事ではなく、私たちの足元にも今も存在する問題だということが分かります。

戦争に関する歴史資料の調査・展示にも力を入れている「武蔵野ふるさと歴史館」公文書専門員の高野弘之さん

は、不発弾についてこう語ります。

「武蔵野市は、10年で約半分の人口が入れ替わるといわれるくらいの転入・転出があり、戦争体験者も年々少なくなっていく中、武蔵野市に刻まれた戦争の記憶をどのように新しい世代や新しく転入してきた人たちと共有していくのが、これからの大きな課題です。不発弾とは、今もそこにある戦争の遺物。あらためて戦争について考えるきっかけの一つとして捉えるべきではないでしょうか」

戦争が終わって今年で75年。しかし、地中深く眠る戦争の「負」の遺物・不発弾について考えると、戦争はある意味ではまだ完全には終わっていないと捉えることもできます。いたずらに不安や恐怖をおおるべきではありませんが、今もなお続く問題として心にとどめながら、その上にある平和な暮らしをかみしめたいものです。

〈参考文献〉

- ・映像「ドキュメント不発弾処理」（昭和63年・武蔵野市）
- ・不発弾処理記録（平成10年・武蔵野市）
- ・企画展図録「中島飛行機武蔵製作所副長の手帳から見る空襲」（平成30年・武蔵野ふるさと歴史館）
- ・平成30年度自衛隊の災害派遣及び不発弾処理実績について（防衛自衛隊合衆像監部）
- ・市報むさしの
- ・武蔵野市百年史・年表編